

## 「わが家について」

2017年04月11日

牧師を隠退し、牧師館から今の住居に越して3年が経ち、わが家となった。年を取ってからは駅に近い団地に住みたいと思っていた。バスに乗り換えることはおっくうだし、鍵一つで外出できるのは便利だからである。駅から徒歩7、8分で、車とすれ違うことなく、団地内の整備された草木と花々を楽しみながら帰宅できる。3階に住んでいる。40数年も前に建てられたので、エレベーターがない。重い荷物がある時は、階段の上り下りがきつい、鍛錬と思っている。別の棟の1階、歩いて1、2分の住居に息子家族が住んでいる。いざという時は、チェンジすればいいと言っているが、わが家が気に入っている。3LDKの間取りで、南向き（多少西に振っている）の3部屋に陽がよく入り、暖かく明るい。

棟の南側には桜の大木が並び、自宅で咲き始めから葉桜になるまで花見を満喫できる。桜は春の開花を待って、冬からつぼみにエネルギーを懸命にため込んでいる。北側は養護学校のグラウンドで、見晴らしが開けている。カーテンを閉めなくとも、見られることはない。風呂上り、バスタオル一枚でも気にせずにおられる。

ベランダから、空気の澄んだ晴れた日には、富士山が見える。朝日を浴びたピンク色の富士山、昼は真っ白な雪をいただいた富士山、夕方は紫色の荘厳な富士山。色々な富士山を楽しんでいる。3部屋が南向きなので、ベランダは結構広い。妻は熱心に花を育てている。バラが十数鉢ある。結婚式や葬式でいただいたバラをさし木にして、育て咲かせている。アンネのバラが気に入っている。草花は耳があると云い、妻は話しかけながら水をやっている。ほとんど1年中、どれかのバラが咲いているような感じである。

桜、ケヤキ、もみじの木に、色んな鳥がしょっちゅう来ている。名前は知らないが、鳥たちは餌を求めると、恋をすることに熱中しているようだ。蜜を求めてメジロが来る。ヒヨドリが来た時は、ヒヨドリが来て、あつという間に食べられてしまう。冬、餌が少なくなった時は、バラの花びら、咲き始めた赤いボケの花も食べられる。

右下の写真は60年を越すポタンである。両親は花が好きで、庭に色々な花を植えていた。ポタンは私が子どもの頃からあった。母が横浜に来た時、ポタンやつつじを持ってきた。木に力があつた時は、十数個の大輪の花を咲かせていた。鉢植えになり、地力が衰え、だんだん小さくなっていった。それでも、根は息づいて枯れることはなく、今年も、花を咲かせた。渡辺和子氏が『置かれた場所で咲きなさい』という本を書き、ベストセラーになっていた。動物は移動できるが、植物は移動できない。置かれた所で咲くしかない。このポタンは栄養不足に耐え、じっと命を支えてきた。鮮やかな花を見て、両親を思い、ポタンの生命力に感じ入っている。

わが家は終の棲家になるのであろうか。私の生命力はいつまであつたのであろうか。終まで、老骨をかこち、私らしく生きたいと思っている。

